

# 関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.23  
2020.3

関東学院中学校高等学校  
百周年  
関東学院六浦小学校七十周年

## 目次

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| はじめに .....                          | 2  |
| 耶蘇の奴隷 .....                         | 3  |
| 関東学院という名で 100 年                     |    |
| －「人になれ 奉仕せよ」のバトンを受け継ぐことができるか－ ..... | 5  |
| 70 周年をむかえた関東学院六浦小学校のこれから .....      | 10 |
| 関東学院六浦小学校 70 周年を振り返る .....          | 12 |
| 学院史資料展 2019                         |    |
| 「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」 .....      | 15 |
| 日米関係史のなかの「中学関東学院」－関東大震災後の一側面－ ..... | 22 |
| 寄贈資料の紹介・編集後記 .....                  | 24 |

## 校舎の今昔



現在の関東学院六浦小学校



関東学院史上初の建物



1965年ころの六浦小学校



現在の関東学院中学校高等学校

## は じ め に

関東学院 学院長 松田 和憲

ここに、皆様の許に『学院史資料室 ニュース・レター』No.23をお届けできますこと、大変嬉しく思います。

本小冊子のここ数年の傾向としては、学院の歴史を掘り起こす編集作業において、「通史」というより、一つのテーマに絞って特集号を発行するといった形態を採ってきました。直近の数年間におけるテーマを列挙すれば、第19号で「学院のキリスト教教育と音楽（パイプオルガン）」に関する特集、第20号は「キリスト教教育の礎となる共同生活『学寮』」と題しての特集、そして、第21号では「学院各校の創立の頃『坂田記念館』」についての特集を組み、そして、前号の第22号では、「関東学院の歴史と宣教師」と題して、学院130年の歴史において重要な役割を果たされた宣教師諸氏の献身と労苦を改めて想起するべく特集を組み、明治以降の日本におけるバプテスト史研究をライフワークとされている大島良雄先生に「関東学院と宣教師」と題する11頁に及ぶ長文を書いて頂いたほか、関東学院にゆかりの深い先生方が、以前に宣教師諸氏について書かれた数編を加えて、関東学院に貢献してくださった宣教師の方々の貴重な働き、足跡を内容として盛り込みました。前号で、改めて、歴代の宣教師の特集号を組んだ理由は、時間の経過と共に、第一次資料が散逸してしまうことへの危惧、また、宣教師から薫陶を受けた世代が少なくなっている事態を考慮し、学院の草創期に生涯を捧げ「学院の礎」を築かれた宣教師の足跡を辿ることによって、次世代を担う人々の記憶に留めて欲しいとの願いがあったからです。

この辺で、本号から小冊子編集の方向性を転換させたいと願っております。前号までは、どちらかと言えば、学院の歴史を辿るということに力点を置いてきましたが、そろそろ創立150周年に向け、将来の学院を展望する方向にシフトしたいと考えました。今後、思いがけなく貴重な資料が出てきた

場合は、その都度、紹介させて頂くとして、基本的な方向性としては、今までの歴史を踏まえつつ、今後の学院はどのような歩みを続けていくべきか、あるいは、時代が変わっても変わることのない座標軸をいかに継承して行ったら良いのか等々の課題や問題について、共に考える小冊子として継続していきたいと考えています。

2019年度は学院創立135周年にあたり、3つの学校でそれぞれ周年行事を行いました。一つ目は中学校高等学校創立100周年、二つ目は六浦小学校創立70周年、そして三つ目として、六浦こども園も創立70周年を迎え、それぞれの学校、園が工夫を凝らした意義深い周年行事を無事終えることができました。

そういう訳ですと、本号は、各学校で責任ある働きをされた諸先生方に、節目の時を迎えて、各学校が今後どのような歩みを続けていくべきか、自由な筆致で書いて頂きました。中高では、現校長・富山先生と前校長・平塚先生にそれぞれ含蓄ある、大変興味深い文章を書いて頂きました。これらについては、つい最近発刊された『関東学院中学校高等学校創立100周年記念誌』と合わせて読んで頂けたら、歴史的経緯がリアルに伝わってくるものと思われます。六浦小学校では、現校長・澤先生には小学校の現況とこれからの展望について、元校長の島田先生にはエピソードを交えての回想録を記して頂きました。そのほか、各学校・各園の現況報告、ボランティア活動、そして、最後に、渡邊氏が第21号に引き続き、関東大震災後における日米関係の中で「中学関東学院」が果たした役割の一断面について特別寄稿してくださいました。それぞれ、大変お忙しい中、寄稿してくださいましたことに心からの感謝の意を表させていただきます。このようにして、第23号を皆様の許にお届けできること感謝致します。2020年度の歩みの上に主の変わらざる支えを祈りつつ。



関東学院六浦こども園創立70周年記念礼拝・コンサート



# 耶蘇の奴隸

中学校高等学校 校長 富山 隆

世の中には前代未聞という言葉があります。いまだかつて誰も聞いたことがない出来事が起きたときの驚きを表しています。

1919年、「関東学院」という名前の学校がこの世に生まれたこと、校訓として「人になれ 奉仕せよ」という言葉が新入生に与えられたこと、前代未聞の出来事でした。

そして100年が経ち、前代未聞の出来事として世の中に受け入れられた学校が、いまなお保たれているのは、聖書に語られている神様、イエス・キリストを土台としているからです。

この、イエス・キリストを土台とした関東学院。改めて思うことは、神様とつながることで手にする自由、人生の拠り所がそこにあるということです。

「私は、主の仕(つか)え女です。お言葉通り、この身になりますように。」(ルカ1:38)

何度も目にした、耳にした、クリスマスにかかわる聖句です。季節外れと感じる人もいるかもしれませんが、「神様とつながることで手にする自由」というメッセージが込められています。

後に夫となるヨセフのいいなずけだったマリア。その身に起こったことは、聖霊によって身ごもるという、前代未聞のできごとでした。驚き、恐れ、おののくマリアですが、天使の言葉を受け入れ、「私は神様の召し仕えです。思召しのままに私を用いてください。」と答えます。

現代においても、2000年前の時代においても、頭で理解することは難しい出来事ですが、イエスを産み育てるという形でマリアは神様とつながります。

そこで、マリアは自由を手に入れたのか。マリアが手に入れた自由をお話する前に新島襄のエピソードを紹介します。

新島襄は同志社を創立した人です。江戸時代末期、鎖国の日本を抜け出し、アメリカにわたり、多くを学び、キリスト教の信仰を得て、日本でキリスト教の学校を作りたいという強い願いをもって帰国した人です。

明治になり、政府が派遣するヨーロッパ視察団の通訳やその他のお仕事を手伝いました。その有能なことが評価され、文部省から学校づくりの仕事を手伝うよう何度も依頼されましたが、かたくなに断り続けたところ、業を煮やした役人から「耶

蘇の奴隸」となじられたということです。そして、役人が投げつけた「耶蘇の奴隸」という侮辱の言葉を、新島は怒るところか喜んでいたというのです。(富田正樹師の説教)

「イエスの奴隷になることにこそ、本当に自由な人間になる」ここに、「神さまとつながることで手に入れる自由」の切り口があるのです。

エーリッヒ・フロムは著書『自由からの逃走』で、ドイツに起こったナチズムへの傾倒の理由を考察し、自由を手にするとは、同時に責任や孤独も受け止め、それ等を含めて自ら求めて行った人が手に入れるもので、初めから与えられているものではないとしました。

そして、責任や孤独の覚悟を持たずに自由を求めた結果、声の大きな強い力に従うことで自らの幸福を求める心理となり、自らが主体的に判断して行動する自由を捨て(逃走し)て、ファシズムの流れを迎え入れてしまったというのです。

与えられた自由ではなく、自ら求めて手にする自由こそが、自由の名に値するというわけです。

この責任と孤独の覚悟を持った自由は、カトリックや聖公会の聖職者がたてる誓いに示されています。

彼らは「清貧」「貞潔」「従順」の3つのことを誓います。

「清貧」。貧しければいいというわけではなく、「足を知る」ということです。お金儲けを目的に生きることはしないということ。持っているお金の多い少ないにとらわれることはないという、お金からの自由ということです。

「貞潔」。言葉の意味としては、結婚しないとか、みだらな関係を持たないということですが、人間関係のしがらみからめとられない、他者からの自由ということです。

「従順」。人間に対する従順ではなく、神様に対する従順です。神様に従うことで、自分自身の感情や欲望の虜になったり、他者を支配したり、操作する愚かな喜びからの解放です。自分を縛りつける自分自身からの自由です。

責任と孤独の覚悟をもった一人の人間が、他者とのつながりではなく、神とつながることで得る自由が示されています。

神さまに誓いを立てた、耶蘇の奴隷のような自由を奪われているように見える人たちも、実は、お金からも、他人から

も、そして自分自身からも自由になっているという現実があります。世の中を作る、カネ・モノ・ヒトの全てから自由になるのが、キリスト教のいう自由というわけです。

マリアもまた、神様を受け入れ、神様の召使いとして、その身と心を神さまに委ねることで、イエスを産み、育て、イエスが十字架にはりつけにされ、息絶え、よみがえり、天に上る姿を見守り続け、世の中のさまざまなしがらみ、支配や差別、圧力や偏見から解放され、自由に生きたということができると思います。

この、神様とつながることで得る自由について、今から95年前の卒業式で、初代院長坂田先生はこんな風におっしゃいました。

校訓「人になれ 奉仕せよ」を最高の目標に置くと、世間と価値観が転換し、どんなに社会的な名声を得ても成功ではなく、逆に、地位の低さや貧乏も失敗ではないとし、真の成功とは我々をお造りになった神の御旨に叶う人間になることだとしました。与えられた場所で自分の最善を尽くすことの貴さを学び、どんな逆境に陥っても、失望せず、希望を失わない方法を学んだのだから、勇敢に進み、雄雄しく人生の戦

いを戦い、不幸にして人生の戦に敗れたとしても、神の国の勝利者となり、真の成功者となってもらいたい、と激励しました。

神の御旨に叶う人間になること、言いかえれば、神様とつながることで、世のしがらみからの自由になることを語っています。坂田先生も筋金入りの「耶蘇の奴隸」であることが伺えます。

新島襄は同志社の卒業生に、坂田先生は関東学院の卒業生に世捨て人として生きることを勧めたわけではありません。この世の務めはしっかりと果し、そのうえで周囲からの評価に惑わされることなく、自分自身の道を進みなさいとの勧めです。神様とつながることで得る、カネ・モノ・ヒトからの自由、自分自身の幸せへのこだわりからの自由、これこそが、人生の拠り所となるということを断言しているのです。

聖書のみ言葉に戻ります。

“Let it be to me according to your word.” (Luke 1:38)

Let it be. 神様から差し伸べられた手につながる希望の言葉です。“whisper words of wisdom” (Lennon & McCartney)に導かれ、関東学院の新たな歩みが始まります。「真理はあなたたちを自由にする。」(ヨハネ8:32)



関東学院中学校高等学校創立100周年記念式典(横浜市開港記念会館)

## 関東学院という名で100年 ―「人になれ 奉仕せよ」のバトンを受け継ぐことができるか―

中学校高等学校 前校長 平塚 敬一

テレビのCMでも話題になった谷川俊太郎の『朝のリレー』  
という詩があります。

カムチャツカの若者が きりんの夢を見ているとき  
メキシコの娘は 朝もやの中でバスを待っている  
ニューヨークの少女が  
ほほえみながら寝がえりをうつとき  
ローマの少年は 柱頭を染める朝陽にウインクする  
この地球では いつもどこかで朝がはじまっている  
ぼくらは朝をリレーするのだ 経度から経度へと  
そうしていれば交替で地球を守る  
眠る前のひととき耳をすますと  
どこか遠くで目覚まし時計のベルが鳴っている  
それはあなたの送った朝を  
誰かがしっかりと受けとめた証拠なのだ

とあります。

眠る前に耳を澄ましてみる、するとどこからか目覚まし時計  
が鳴り響く。それは私たちが過ごした今日の朝を、どこか別  
の国の誰かがしっかりと受け取って、また新しい朝を過ごし始  
まる そうやって次から次へと朝はリレーされていく ここにこ  
そ 地球上で途切れることなく営まれている朝という平和な時  
を 人類みんなで守っているという内容の詩として受けとめる  
ことができるように思います。関東学院という名で100年が経  
ち、校訓「人になれ 奉仕せよ」のバトンは受け継がれてきた  
のか、また将来へどのようにバトンを手渡すべきか考えてみる  
時を迎えているように思います。

1917年、当時の神奈川県知事有吉忠一は、C・B・テンネー  
先生と坂田祐先生に「キリスト教の教えに基づいた学校を作

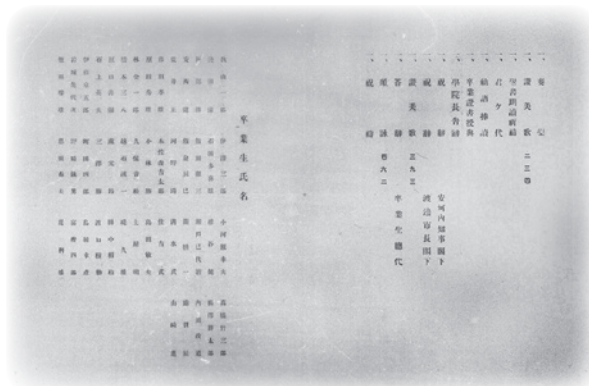
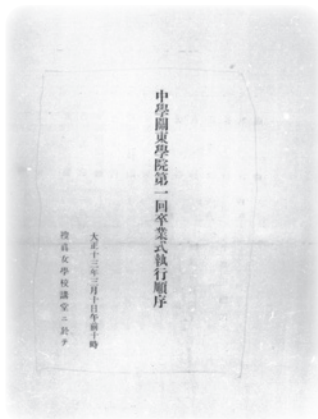


解体前(2012年)の中学旧本館  
(1992年 横浜市認定歴史的建造物に指定)

り、横浜から世界に通用する人物を輩出してほしい。そのた  
めに兵隊山(三春台)の土地を格安で提供したい」と提案しま  
した。そして、その2年後の1919年1月27日、横浜市開港記  
念会館において関東学院の設立披露会が開かれ、神奈川  
県知事有吉忠一はじめ県内外の学校関係者が集まり「中学  
関東学院」は出発することになります。関東学院中学ではなく  
「中学関東学院」としたのは、公認の学校では宗教上の儀  
式、教育を行うことができないとする文部省訓令12号に対抗  
してキリスト教教育を明確にさせたことにあります。関東学院  
設立の当時、第一次世界大戦は終結していましたが、日本  
は中国や朝鮮へ軍事的拡大を画策していた時代でありまし  
た。そのような状況の中でキリスト教の教育を行うことには相  
当な緊張感があったと思われます。そして4月9日には、146  
名の新入生を迎えて「中学関東学院」の第一回の入学式が  
行われ、学院長坂田先生は「人になれ 奉仕せよ」の校訓を  
力説しました。坂田先生が「イエス・キリストという土台」を据  
えて、そこに教育の原点を求めて宣言し、提唱し、実践し  
たのが「人になれ 奉仕せよ」でありました。坂田先生は「諸  
子は将来学者になり、教育家になり、実業家になり、政治



家になり、弁護士になり、医者になり、軍人になるであろうが、何者かになる前に、先ず人にならなければならない」と強調されました。そして、1924年3月10日、第一回の卒業式において「人になれということと、奉仕せよということは離すべからざることで、人の徳は奉仕によって磨かれるのである。わが学院の標榜するところはこの点である。これはわが学院の存在する限り主張されるべきものである。」と「人になれ 奉仕せよ」の精神を一層明確に示されたのでした。イエス・キリストが33年の生涯において示された行動にこそ「人になれ 奉仕せよ」の真髓がこめられているのではないかと思います。イエス・キリストが貧しい人、病める人、悩める人、弱い人の側に立って為し得た行為が、坂田先生が「人になる」と「奉仕する」ことは不即不離と言われたことにつながるのだと思います。この意味からもイエス・キリストに倣う生き方が「人になれ 奉仕せよ」を体現することになるのだと言えます。坂田先生が『恩寵の生涯』の中で「キリスト教教育は何かまい方法で、異教徒をクリスチャンにすることを目標とすることではない。キリストへの教育ではなく、キリストからの教育である。」と述べておられます。この「キリストからの教育」とは、聖書に示されたイエス・キリストの生き方に倣う教育と言うことができると思います。「人になれ 奉仕せよ」は、この意味において聖書の言葉を根源とすると、キリスト教教育の真髓を表すものとなるのです。



中学関東学院 第1回卒業式次第

坂田先生は、明治のキリスト教思想家内村鑑三の門弟として、また第一高等学校校長新渡戸稲造の学生として、二人の教えに強い影響を受けていると考えられます。内村や新渡戸は札幌農学校でクラークの「Boys, be ambitious」(青年よ、大志を抱け)の中にある「Be a gentleman」(紳士たれ)を聞いていました。これは「人になれ 奉仕せよ」に非常に似ているのではないかと思います。人の権利を犯さない、そして自分の権利を守るというのが「gentleman」だと思うのですが、そういう倫理的な意味を超えて、もっと深いところで坂田先生がイエス・キリストの本質を言い表されたのが「人になれ 奉仕せよ」の言葉だと思われるのです。そして、さらに新渡戸は第一高等学校の校長時代に学生たちに「to do」の前に「to be」であれと常に語っておられました。その言葉を学生として聞いておられた坂田先生が「to do」が奉仕で、その前に「to be」で人があるのだと考え、「人になれ 奉仕せよ」との表現を使われたのかも知れません。もちろん、坂田先生が祈らないで教育はできないと言われたことを思う時に「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ5:48)の中に「人になれ 奉仕せよ」という言葉の源泉があると思われます。とにかく坂田先生は「人になれ 奉仕せよ」は自分で作ったものではなく、聖書から与えられた言葉であるとしばしば語っておられます。

1969年2月、私は初めて横浜三春台の丘に校長面接を受

けるために行きました。時代は70年安保闘争の真っ只中で過激な武装集団が大学を席卷していました。大学院の研究室にいた私は、中国近代史の勉強に取り組んでいましたが、研究室も封鎖されたり、指導教官が退官するなどともに研究に

打ち込める状況ではありませんでした。そのような折に関東学院から世界史専攻の教諭として採用したいので来校されたいの手紙を受け取りました。校長室で山本太郎先生から中国史の研究のことやキリスト教との出会いについて質問がすむと「平塚さん、4月から社会科の教師として採用します」と辞令のような言葉がありました。即座に「よろしく願いいたします」と返事をして、至極あっさりした採用試験に戸惑いを覚えました。しばらく雑談をしていると偶然に元院長の坂田先生が入ってこられました。杖をついておられましたが、背筋を伸ばし古武士のようなたたずまいを感じました。さすが会津の白虎隊二番隊長日向内記の孫としての風格を備えておられました。山本校長が4月から関東学院の教師になる私を紹介すると、坂田先生は「関東学院のキリスト教教育を受け継いでください」との言葉がありました。振り返ってみると坂田先生は私に「人になれ 奉仕せよ」のバトンをしっかりと受け継いでくださいと言われたように思われるのです。その年の12月16日に坂田先生は逝去されましたので私にとってたった一度の坂田先生との出会いは不思議な運命であったように思えてなりません。

1990年12月のある日、高野利治理事長から電話があり、理事会で次期校長に推挙されたので法人事務局に出頭するようにとのことでありました。まさに青天の霹靂の事態が起こったというのが



初代学院長 坂田祐

がその時の私の素直な心境でありました。これまでの校長は坂田先生から直接に薫陶を受けられた方々ばかりであり、生徒として「人になれ 奉仕せよ」を体現されておられました。卒業生でない私が校長の重責が務まるのか一抹の不安を感じながら就任式を迎えました。1991年4月3日、旧中学校校舎

の3階の小講堂で校長就任式は行われました。その後、コペルホールでささやかなレセプションがあり、橄欖会元会長町田四郎氏が挨拶をされました。町田氏から「新校長平塚先生は第6代目である。初めて本校の卒業生でない校長が誕生し、幅広く大きく育てゆく母校に期待した。その時代の移りゆく様を見て、これでよいのだ、との感想を私は抱いた。(中略)平塚先生の祖父は、牧師であり、キリスト教界の先達であった。友人の兄妹6人はいずれも旧制中学時代を本校と同じようなキリスト教主義学校に学び、信仰をもって、福祉、教育、産業それぞれの分野で大きな貢献をされたし又しておられる。その家庭教育にある一本の強い骨を私は見る。先生もこの一本を忘れないようにと願い、私も見守ってゆきたい」(1991年香柏会機関誌『香柏』第50号)と温かい激励の言葉を受けて、私は与えられた職責を果たしていく覚悟のようなものができたように思っています。

学院在職中、「人になれ 奉仕せよ」は通奏低音のように私の魂を揺さぶり続けました。私なりに、ずっと、この言葉の意味を考え続けました。「人になれ 奉仕せよ」はどのような人間になれと言っているのか、と思い悩み続けました。特に校長に就任して以来、「人になれ 奉仕せよ」を伝える責務を痛感し、入学式や卒業式などで私なりの言葉で語ってきましたが、語るたびに次から次へと尽きない含蓄のある校訓であることを知ることになります。

校長就任まもなくキリスト教学校教育同盟の機関誌『キリスト教学校教育』の「私の主張欄」に関東学院の建学の精神について書くようにとの依頼がありました。私は、星新一の短編『服を着たゾウ』(新潮文庫『マイ国家』の一編)を引用して校訓「人になれ 奉仕せよ」を記すことにしました。「特別の才能を持った催眠術師が動物園のゾウの檻の前を通りかかりました。すると一頭のゾウが近づいてきたので催眠術師は『お前はゾウではない。人間なのだ。人間の心を持ち、人間と

して考え、人間の言葉を話せる。いいかお前は人間なのだ』とゾウに話しかけました。催眠術師は遊びのつもりでしたが、この催眠がゾウにかかってしまいます。人間になったゾウは檻のカギを開け、動物園を出て行きました。その後、芸能プロダクションに雇われ、タレントとしてたちまち人気者になります。そして、お金のたまった人間になったゾウは子どもたちに夢を、大人には休養を与える遊園地を作ります。人間になったゾウは儲けたお金で菓子やおモチャの会社を経営し、恵まれない人たちに惜しげもなく寄付しました。ある人が人間になったゾウに『あなたは大変成功なさいました。その秘訣は何なのですか』と尋ねました。すると『さあ、別に心当たりありませんが、無理にあげれば一つだけあります。私の心の奥にお前は人間だという声がひそんでいるのです。しかし、人間とは何か私にはよくわからなかった。そこで本を読んで勉強したのです。人間とはどういうものなのか。人間ならばなにを為すべきなのかについて、常に学び、考え、その通りになったただけのことです。私が世の中に役に立っているとすればこのためかも知れません。あなたがたは、自分が人間であるということを考えたことがありますか』と答えました。ゾウが人間だという声を心に絶えずひそませ、人間として何を為すべきかを問い続け、そしてそれを実行したのです。それがゾウの成功のもとであったというのです。』(1992年『キリスト教学校教育』5月)と記述しました。そして、人間になったゾウが自分が人間だという声を心にたえずひそませたように、私たちも校訓「人になれ 奉仕せよ」を自分へ向けられた言葉として捉えていかなければならないと自らに言い聞かせました。

1999年1月27日、創立80周年記念式典で私は次のような式辞を述べました。「今年1月27日で80年目を迎えました。今から、80年前の、1919年1月17日に、横浜市開港記念会館で関東学院設立の祝賀会が開催され、4月9日には、わずか146名の小さな学校が始まりました。創立当初からキリスト

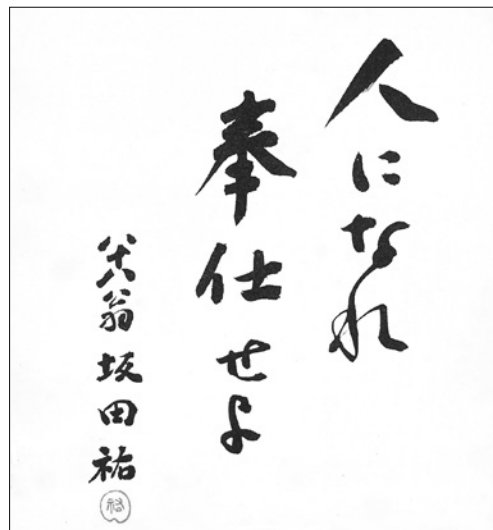
教に基づく教育を建学の精神とし、真理を追求する場としてきました。私たちは、ただ80年の歴史を重ねてきたというだけではなく、この間、数えきれない先達の労苦と努力に支えられてきたことを忘れてはなりません。その歴史の中で太平洋戦争中の厳しく暗い時代を迎えた時期もありましたし、高度経済成長のような生徒急増の時期も経てきました。そして現在、学校教育全体の運営が非常に難しい時期にもさしかかっています。私たちはこのような状況の中で、80年にわたって蓄えてきた経験と将来に向けての創造的な展望を持たねば、社会の中で取り残されてしまいます。現在、私たちを取り巻く社会や経済の状況は厳しいものがあります。このような時代になると、当面のことだけを考え、また目先の関心事だけを考えてしまいがちです。それでは21世紀に先駆けていくキリスト教学校として社会で認められなくなります。関東学院は、光あり、影あり、闇ありと現在までさまざまな道を歩んできました。その中で指標となるものは『人になれ 奉仕せよ』にあると思います。これは人間は神によって創造されたかけがえのない存在であるということを基盤としているのです。一人ひとり独自の人格と能力が与えられており、すべての人に生きる意味と役割があるという聖書の価値観が、その根底にあるのです。私たち人間は、一人ひとりが生涯をかけて創造された人間としてふさわしい生き方をしていかなければならないのです。これまでの関東学院の歴史を調べて気づくことは、発展と同時に、挫折や失敗も数多くあったことがわかります。関東学院の歴史の意味は、そのような困難の克服と軌道修正の過程にこそあるのだと思うのです。校訓『人になれ 奉仕せよ』とは、抽象的な理念とか理想的な目標だけではないと考えています。それは坂田祐先生が掲げた『人になれ 奉仕せよ』を、今ここで関東学院に関わっている一人ひとりが、どのように自らの生活の中に具現化しているかということだと思っています。私立学校の真価は、その学校がどれだけ世にい



業績を残したかよりも、もし、たとえ業績を残し得なかったとしても、どのような姿勢で、今何を為そうとしているか、為しているかによって決まると言えるのではないのでしょうか。(中略) 80年にあたり、単に感傷的に過去を回顧することに留まるべきではありません。現在の日本社会は高度経済成長に心を奪われ、やがてバブルがはじけて初めて心の貧しさに気づき、今日の教育の荒廃、家庭の崩壊に恐れを抱いているのではないのでしょうか。関東学院の前途にも、経営上の困難、キリスト教教育の混迷、社会との摩擦など諸問題が横たわっています。時代の転換期に生きる私たちには厳しい現実が待ち構えています。このような時代だからこそ、私たちは、単なる処世術ではなく、イエス・キリストを信頼して転換期の諸問題に対応していかなければなりません。自由と真理に基づくキリスト教教育、つまりイエス・キリストが実践されたバトンを受け継いでいくことであります。」(1999年『橄欖』新版第16号)と述べました。

100年を迎えた関東学院の歴史は、苦難に満ちた歩みの連続であったと思います。そして、現在もそうであり、将来も恐らく待ち受けているであろうと思われます。そのような中で関東学院が変えるべからざるものとして継承したものは何だろうかと考えてみました。換言すれば関東学院の伝統、校風、特色と言えるものであります。単なるスローガンではなく、目には見えないけれども確かに関東学院の歴史の中に息づいているものか何かということです。私は高校校舎が完成した時に玄関の壁面に「真理はあなたがたに自由を得させるであろう」(ヨハネ8:32)という聖書の言葉を刻むことにしました。それは自由こそ人間の人格の中心であると考えたからであり、それを失うならば人間は人間でなくなると思ったからです。それほど自由は人間にとって重要なものであります。そして、関東学院は、この自由を歴史の荒波に揺さぶられながらも、大切なものとして守り育ててきました。イエス・キリストは、長い

伝統を持つユダヤの律法から解放されて、あらゆるものから自由になって生きられました。そのイエス・キリストの生涯を歩んでいこうというのが「人になれ 奉仕せよ」の考え方であります。これこそが関東学院の歴史を貫いてきた自由というものであります。坂田先生が「人になれ 奉仕せよ」と言われてから既に100年が経ちました。果たして坂田先生や先達の人々が守り育ててきた関東学院の自由が私たちのもとに届いているのかと危惧の念を抱いています。学問や科学技術の進歩・発展、社会の制度など絶えず大きな変化が続いています。関東学院もそれに迅速に対応しなければ沈滞し、老朽化していきます。しかし、一方に変えてはならないもの、守り育てていかなければならないものがあります。現在、関東学院も時代の曲がり角を迎え厳しい現実の前に立たされているのではないのでしょうか。100年前に坂田先生がかつて語られた「人になれ 奉仕せよ」を私たちへのメッセージとして、私たちの現実で受けとめようではありませんか。なぜなら、ここにこそ坂田先生の志を支え、貫いたところの原点があり、その原点に私たちも立ち返るときにはじめて、坂田先生の志を共有することができるのではないのでしょうか。私たちは、坂田先生に出会えたことに喜びを感じながら「人になれ 奉仕せよ」のバトンを受け継ぐ走者でありたいと思います。



## 70周年をむかえた関東学院六浦小学校のこれから

六浦小学校 校長 澤 章敏



「のびる」を伸ばす六浦小学校

1949年に設立された関東学院六浦小学校は今年で70周年を迎えました。ちなみに、同年に神奈川県私立小学校協会が設立されており、県内の私立小学校教育が活発になりつつあった時期に本校が誕生したことがうかがわれます。これまでの歩みは本号掲載の島田正敏元校長による記事に譲りして、ここでは、六浦小学校の現状と今後に向けての展望を記したいと思います。

2019年6月1日、本校礼拝堂において70周年記念礼拝を守り、その後、記念講演会を開催しました。記念礼拝では、本校卒業生の兼子洋介さん(第38回生 ホセア・アモス組。六浦中学校・高等学校卒)に説教をお願いしました。兼子さんは現在、大阪の日本基督教団 富田林教会の牧師を務められています。周年記念礼拝にふさわしく、校訓「人になれ 奉仕せよ」を正面からとりあげ、「人間になろう」と題して、校訓に込められた願いを児童にわかりやすく説教してくださいました。



記念礼拝：兼子牧師

記念礼拝につづく記念講演会では、やはり卒業生の小泉進次郎さん(第40回生 ヨシユア・ヨナタン組。六浦中学校・高等学校、大学経済学部卒。衆議院議員)にお話ししていただきました。小泉さんも校訓がいつも心の中にあるとしたうえで、「日本にいては日本のことはわからない」「今の友達が一生の友達になる、友達を大切に」「日本はこれからもっとよくなる」という3つのことを強調し、そのあと児童会会長・副会長、在学時の担任2人と壇上でトーク、さらに各学年からの質問に答えてくださいました。

こうして70周年の節目を迎えた六浦小学校の現状と今後の課題・展望について記します。

2019年10月1日(後期初日)現在、児童数は256名(内訳は表のとおり)で、男子が55%、女子が45%です。私立小学校は女子校が多いので共学校はどうしても男子が多くなりがちですが、本校では男女比は1:1に近くなっています。これは入試時に調整しているわけではなく、自然にこのような数値となっています。男女比が大きく変わらないことは児童募集においてとくに女兒の保護者には好印象を持っていただいています。

|     | 男子  | 女子  | 合計  |
|-----|-----|-----|-----|
| 1年生 | 29  | 13  | 42  |
| 2年生 | 19  | 15  | 34  |
| 3年生 | 24  | 22  | 46  |
| 4年生 | 21  | 20  | 41  |
| 5年生 | 24  | 18  | 42  |
| 6年生 | 23  | 28  | 51  |
| 合計  | 140 | 116 | 256 |

(児童数：2019年10月1日(後期初日)現在)

記念講演において小泉さんが、「少子高齢化が進む日本ではそれをマイナスとして将来を心配する人が多いけれども、日本は必ずよくなる。自分の在学時の1クラス40人に比べると、今は一人ひとりが先生によく見てもらえて幸せだ。」と述べていました。小学校の児童数減少と日本の将来を直截的に結びつけることの是非はさておき、たしかに少子化はマイナス面だけではありません。



記念講演：小泉進次郎さん

そこで、私たち六浦小学校では、少人数であることを肯定的にとらえ、その利点を生かして教育を充実させていく方向で進んでいます。そして、本校スーパーバイザーの基本提案をうけて、全教職員が全力を注いで、そのための取り組みプランを策定しました。それが「六浦小モデル19-23プラン」です。5カ年計画で、本年度2019年度と2020年度を試行期間とし、2021年度から本格実践していきます。子どもたちが自ら個性を発見して伸ばしていく力を育もうとするこのプランは、次の3つを柱としています。

○私のパレット：学習の個性化

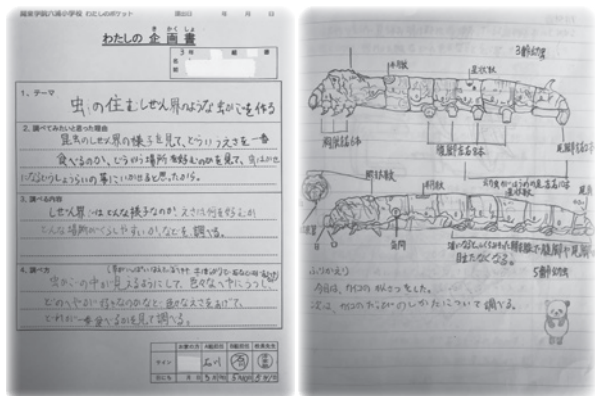
国語・社会・算数・理科・英語等の教科学習において、テーマや難易度の異なる学び方の選択肢を設け、児童が自分の意思で選択して学習していきます。

試行初年度の実践例を紹介します。6年生算数「円の面積」の単元で、1クラスの児童が「ぐんぐんコース」と「じゅくりコース」のいずれかを選択して2つに分れ、異なった方法・

進度で円の面積の求め方を追求しました。

### ○私のポケット：自己表現の個性化

全国の小学校では「総合的な学習の時間」は、学年単位あるいはクラス単位で同一の課題に取り組んでいます。本校ではこれを「個人総合」として児童一人ひとりが自由にテーマを決め、企画書を作り、達成に向けてとことん追求します。目標達成までの期間や発表の方法なども一人ひとり違ってきます。発表はこれからですが、パワーポイントを使ったプレゼンテーション、新聞作成、紙芝居、図鑑作成等々、児童はさまざまに計画しています。



3年男子「私のポケット」企画書 3年男子「私のポケットノート」から

### ○私のドア：学校生活の個性化

作品を展示・発表できるギャラリー(夏休みに改修)、寝転んで本が読める図書館(夏休みに改修)、秘密基地にもお家にも潜水艦にもロケットにも想像次第で何にでもなる土管の設置など、想像力を刺激し、学習を楽しめる魅力ある環境を整備します。また後期からは「私のパレット」「私のポケット」の探求や発表に必要な児童用iPadを追加導入し、1つの学年で活動する際の一人一台が実現しました。

この「六浦小モデル19-23プラン」は試行一年目、児童とともにさまざまな取り組みに挑んで、よりよいものに毎日進化しています。

児童募集の広報活動を通して、小さなお子さんをもつ保護者が私立小学校に求めているものが見えてきます。「六浦小モデル19-23プラン」に在校生保護者だけでなく、強い関心が寄せられていることから、「みんな一緒」ではなく「一人ひとり」が持っている個性を伸ばすことが期待されていることがわかります。六浦小学校は「『のびる』をのびす小学校」をキャッチフレーズに、そのような保護者のニーズに応えようとしています。

また、放課後預かり「カナン」は4年前の初年度は平日利用者が数名でしたが、今年度は十数名、多い日は27、8名という盛況ぶりです。お弁当サービスの「マナランチ」は60%が利用、自動車での送迎用ロータリーを設けたところ15%くらいが毎日利用しています。

学習指導要領の改訂で教科となった英語教育への関心も高く、インターナショナルの幼稚園・保育施設に通う園児の

志願者が増加しています。本校の英語は1年生から週2時間、6年間では公立の3.2倍の授業時間となります。現在「私のパレット」も取り入れた本校ならではの英語の授業を目指してさまざまな取り組みを検討しています。

さらに制服でも社会的ニーズへの対応を考えました。今年の冬から長ズボンを制服に加えたのです。男子のみではなく女子も長ズボンオーケーです。男子は半ズボンまたは長ズボン、女子はスカートまたは長ズボンを選んで着用します。寒さ対策であることはもちろんですが、それよりも大きな目的は安全対策です。世の中では残念ながらさまざまな事件に児童・生徒が巻き込まれるケースが後を絶ちません。さらにトランスジェンダー対応という面も考えました。児童の安全・安心のための長ズボン導入です。

六浦小学校は、70年におよぶ伝統を継承すると同時に、社会の求めに対応しながら日々発展を続けています。そして、その根底にあるのはキリスト教に根ざした教育、校訓「人になれ 奉仕せよ」です。キリスト教に基づいた教育により奉仕する心、他者のために奉仕する、貢献する心を育てるとともに、それを将来実行できる力の基礎学力を養成すべく、教職員一同教育の業に励んでいます。

先日、ある保護者の方から次のようなお話を伺いました。

朝、子どもが登校した後、人身事故で電車が運転を見合わせているという交通情報メールが届いたそうです。子どもが電車に乗っている時間帯なので心配して、非常用に持たせているキッズ携帯に電話をかけてもつながらない。ようやくつながったのは30分ほどたってから。『だいじょうぶ?いま何をしているの?』と聞くと、『いまお祈りしたところ』との答え。同じ車両に登校中の本校児童が数名いて、だれが言い出したのかはわかりませんが、事故にあった方、電車に閉じ込められて不自由な思いをしている方、また心配してくれている家族の心を慰めてください、とみんなでお祈りしたら、周りの人たちがすごく喜んでくれた、というのです。

児童たちの中に確かなものが育っていることを知ることができました。関東学院六浦小学校は神によって建てられた学校です。「人になれ 奉仕せよ」を実現する人材をこれからも育てるべく教職員一同で心を合わせて歩んでまいります。



70周年記念礼拝・講演会



# 関東学院六浦小学校70周年を振り返る

六浦小学校 元校長 島田 正敏

関東学院六浦小学校が設立されたのは1949(昭和24)年です。太平洋戦争が終わって4年目、朝鮮戦争の始まる1年前のことです。食べるものさえ十分でない多難の時代でした。当初は関東学院小学校としてスタートしました。(1953年校名が関東学院六浦小学校に。)坂田祐院長(初代校長)のプロテスタントの信仰によって創設されました。

関東学院幼稚園の第一期生が学齢に達する頃、同じキリスト教だから公立小学校ではなく横須賀のカトリック系の小学校に入学させようという動きが保護者の方々から出てきました。しかし坂田先生の決断によって本校は歩みを始めることができました。入学したのは幼稚園の第一回の卒園児、中学部在学中の生徒の弟妹、校友の子弟など25名でした。クラス名はイサク組でした。小学生用の施設は皆無でした。教室は中学部の一部を借用しました。小学生用の施設はジャングルジムだけでした。昭和24年の9月には学校給食が始まりました。しかしながら昭和27年学校給食は廃止されました。当時は、英語の授業も行われていました。

本校の教育についての実践と方向性を知るために、小学校創立30周年記念誌に記された本校の教育についての文章を紹介します。

## \*本校の特色

官制の教育体制の上に私学としての独自の教育を加え行うことは、他の私立小学校と同じであるが、本校においてはさらにキリスト教の愛の精神、人間の価値観を教育の基礎と

して、国家、世界の要望に応える人格の完成を目指している。

## (1)キリスト教教育

始業前の礼拝に始まり、終業時の祈りに一日の学校生活が終わるが、その間に聖書のことばを学び、クリスマス、イースター、その他キリスト教に対する理解を深める。

## (2)教科指導

1, 2年生は学校における学習態度を厳しく養うために、家庭学習は特別な期間以外は行わず、専ら生活指導と遊びに時間の不平が是正され、多くの教師に接することによって人格的にも円満な成長が期せられる。学級管理上の欠陥は、同学年担任間の密接な連携と努力によって補うことができる。

## (3)主体性のある児童を養うための特別活動

\*自然学校 7月に学年ごとに行い、キリスト教教育の徹底と自然学習を行い、自主的な生活態度を養う。

\*クラブ活動 5年以上が14のクラブにそれぞれ加入して、毎週土曜日に2時間ずつ行っている。

\*児童会 全校児童によって組織され、学級会、学級選出議員によって構成される議会を通して立案、決定された規則に従って各委員会が実行を計る。

\*他に、児童合唱団、トランペット鼓隊がある。

以上のように、学校の教育過程は、学力の充実を計りながらも、学力偏重に陥ることのないように、キリスト教による正しい躰、自主性に富んだ判断力のある児童の育成を目標として努力している。



第1回入学式(昭和24年4月)



第1回運動会(昭和26年秋)

本校の教育の目指す人間像は、時代を超える普遍的なものであり、すべての時代に生き生きとした人間の活力たり得る人格と知性とを備えた人間像なのである。

この文章に記されている「主体性のある児童を養うための特別活動」について現状を説明します。

＊自然学校

この行事は1952年に始まりました。日本中が貧しくて旅行どころではなかった時代企画実行されました。反対もあったと思いますが実施されました。先輩の先生方の先見性に尊敬の念を抱きます。「自然学校」という名前も素敵です。

現在は、多くの学校で宿泊行事を行っています、本校はその先駆けであったといえるでしょう。

- 第1回 3,4年生、箱根大涌谷温泉「冠峰楼」
- 第2回 3年生、伊豆吉奈温泉「東府屋」
- 4,5年生、蓼科温泉「山紫閣」
- 第3回 3年生、伊豆嵯峨沢温泉「嵯峨沢館」
- 4年生、箱根仙石下湯「万岳楼」
- 5年生、水上上原「国鉄・山の家」
- 6年生、清里「清泉寮」

(以下、略)

6年生の自然学校は、現在も清里の「清泉寮」で行われています。親子2代にわたり清泉寮に宿泊する時代になりました。清泉寮に宿泊する団体の中では、もっとも古いと思います。

子どもたちは、グループに分かれてコテージに泊まります。自分たちでルールを作り、部屋の片づけなどをみんなでします。先生方と離れて宿泊するのは初めてなので、夜遅くまで話をするグループもあります。また野外での飯盒炊飯も楽しみの一つです。みんなでカレーライスを作ります。学校で練習しているので失敗することはありませんが、ご飯が硬かったり柔らかかったりします。

飯盛山登山も最初から行っています。頂上に立った時の爽快感も忘れられないようです。また清泉寮で食べるソフトクリームも楽しい思い出になっています。

清泉寮の食事はとてもおいしいです。子どもの中には「もっとここに泊まりたい。」という子もいます。小学校生活最後の自然学校が一番楽しかったという卒業生が多いです。

＊新聞委員会が発行する「子どもかんらん」

1956(昭和31)年5月22日に創刊号が発行されました。指

導は、原 正先生でした。この新聞は、毎日小学生新聞社賞や朝日新聞社賞など多くの受賞歴があります。

現在も石川雄治先生の指導で新聞委員が意欲的に活動し、新聞を発行しています。

原先生が立ち上げた、神奈川県私立小学校「まめ記者講習会」は今年で53回になりました。たくさんの子供たちが参加して、多くのことを学んでいます。

＊トランペット鼓隊・合唱団

合唱団は1963(昭和38)年、トランペット鼓隊は1970(昭和45)年に結成されました。指導者は、田上雅章先生でした。現在、合唱団は大日向聡子先生、トランペット鼓隊は長谷川綾子先生と安藤修平先生の指導で元気に活動しています。

1994年から始まったタイ・ティワタ村の

子ども寮支援活動について

タイの古都チェンマイから南西に300キロ。車で約6時間走った山岳地帯に少数民族のカレン族が住むチパレ地方があります。約40の集落が点在し、カレン語を話す人々が高床式住居で暮らしています。学校は中心部のティワタ村にしかありません。学校まで歩くと、近い子で4時間、遠い子は2日かかります。そのため多くの子ども達が学校に通えませんでした。1992年、カレンバプテスト連盟の牧師であるダウ先生が、ティワタ村に寮を建てました。寮費は一ヶ月 100バーツ(約300円)です。28名の子どもたちがいましたが、寮費を払えない親が多くて運営できない状況になりました。

1994年、私たちは現地を訪問しました。寮は一棟だけでした。屋根は、木の葉を集めて竹で刺したものを乗せ、床は竹を敷き詰めたただけでした。部屋の真ん中を竹で区切り、男の子と女の子が生活していました。寮には電気がなく、車のバッテリーに蛍光灯をつないで、その下で勉強をしていました。

冬は零度近くになるのですが、子どもたちに冬の衣服はなく、夏服のまま生活していました。夜になると気温が下がりはじめますが、子どもたちは毛布がないので、体を重ね合わせて寝ていました。食事は、辛いスープにご飯だけです。スープの具は、子どもたちが育てた野菜でした。しかし野菜がないときは、みんなで山の中へ行き、食べられる野草を取ってきて具にしていました。バナナの木の花の芯の部分も貴重な食料品です。子どもたちは、小学校や中学校を卒業するとみんな村

に帰って農業をしていました。高校に進学する生徒は一人もいませんでした。

## 2019年8月

「第18回タイ訪問団」がティワタ村を訪問しました。児童5名と保護者、卒業生2名、教員4名、学院関係者3名が参加しました。

この寮は28人から始まりましたが、今は138人の子どもたちが学校に通っています。しかし、まだたくさんの子どもたちが、学校に行きたくても行けない状況です。カレン族は、独自の文字と言語を使います。子どもたちの親は、タイ語を理解できません。子ども達がタイで生活していくためには学校でタイ語を学習しなければなりません。

本校ではチパレ委員会を立ち上げ、児童会活動の中で支援活動を継続しています。

私は今回この原稿を書くにあたり、本校の資料を再度調べてみました。その中で特に印象に残る詩を見つけました。学院関係者に知っていただきたいと思い最後に記載します。

作者は、元校長の下平千太郎先生です。

小さな愛する友たちへ

(三十年の記念日に寄せる)

アメリカの小さな村の

ひとりの貧しいおばあさんが

一羽のめんどりを飼っていた

「このとりの産んだ卵の代金は

神さまのため、日本のために、

いつもお献げいたします」

こんなささやかな献金が

積み積ってこの横浜に

関東学院が建てられた。

このおばあさんのことをいつも

中学一年生のボクたちに

話してくれた先生がいた、

「だから一本のチョークでも

とてもむだにはできなくて

小さくなるまで使うのさ」

ボクはこの言葉を今でも忘れない、

そしてその関東学院に

この小学校がやがて生まれたのだ。

それから年が流れ日経って、

関東学院は六十年

六浦小学校は三十年、

たくさんの友だちが入学して

うれしい時は一しよに飛び上り

悲しいときは一しよに涙を流し

助け合ったり励ましあって

胸に希望の火を燃しながら

ここを翔び立って行った。

きみたちよ、忘れないでほしい

学校のできたときのこと

たくさんの先輩たちのことを、

そして、今きみたちに望みをかける

お父さんお母さん、先生たちを、

「主を待ち望む者は新たなる力を得、

わしのごとく翼をはってのほらん」

このイザヤ書のみことばを。

きみたちはいつも輝く光の子だ。

## \*参考資料

・『関東学院六浦小学校創立三十周年記念誌』

編集：関東学院六浦小学校 1979年10月発行

・『目で見える40年の歩み』

編集：関東学院六浦小学校 1991年2月発行



学院史資料展 2019

## 「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」

## 六浦こども園からの報告

障がい者活動ホーム「金沢福祉センター」と  
年長組の子どもたちとの交流

6月13日花の日礼拝が捧げられた後、年長組の子どもたちが「金沢福祉センター」へお花を届けに行きました。毎年、訪問するクラスはセンターにいる方達とどのような交流をしたのか、前日に話し合って何うことにしています。今年は、子どもたちから歌のプレゼントと6月末に行われるおりぶ祭のお誘いをしたいという声がありました。おりぶ祭は自分たちも楽しみにしている園の行事の一つです。お家の方だけでなく、地域の方達も大勢集まる大きなお祭りにセンターにいる方達をお招きして一緒に楽しみたいという思いが子どもたちにあったのです。センターに到着すると、ご挨拶も早々子どもたちが「おりぶ祭があるので、是非来てください!」とセンターの方達に声をかけました。すると、皆さんがとても喜んで「行きますよ」と応えてくださいました。そして、センターの方達もおりぶ祭でお店を開くという話をしてくれました。それを知ると子どもたちは「どんな物売るんですか?」と質問しました。すると、センターの玄関に飾ってあったアイロンビーズの作品を指して「これを売るんだよ」と教えてくださったのです。「すごいなあ」と子どもたちはその作品を見て感心していました。「他にはどんな物売っていますか?」と質問し、子どもたちはセンターにいる方達が手作りで色々な物を作っていることを知りました。素直に驚いたり感心したりしながら認めていく子どもたちの姿から、他者と向き合う姿勢の原点を見た気がしました。センターの外看板に手作りクッキーの種類が書かれた貼紙を見つけると子どもたちは、早速どの味を食べたいのかどれが好きな形かなどお互いに言いながら、「今度、ママと買いに行こう」と話して



いました。

センター訪問後、おりぶ祭のために話し合いをしている時のことです。年長組の子どもたちは、おりぶ祭で大人のスタッフと同じように自分たちでゲームコーナーを担当するのですが…自分たちの担当以外に「センターの方達のお店のお手伝いができないかな」という声が子どもたちから出てきました。そして、自分たちにどんな事ができるのか考えていく中で『センターの方達はどんな事をしてほしいと思っているかも聞いてみよう』という事になりました。センターに連絡を取り、子どもたちの思いを伝えると、「センターのお祭りのチラシ配りとお店の呼び込みをしてほしいです」というお返事が返ってきました。それを子どもたちに伝えると、どのようにチラシを配るのがよいのか、またお客さんにお店に来てもらえるにはどうしたらよいかを考え始めました。『他人の役に立ちたい』という思いは、きっとどの人も持っているはずなのですが、それを実現する事は中々難しいです。でも、子どもたちのように相手のことを自分のことのように置き換えて考えると、それはたやすいことなのでしょう。

おりぶ祭当日、子どもたちは交替でセンターの方達のお店の呼び込みやいらしたお客様とのやり取りのお手伝いなどをさせてもらいました。また、知らないお客様にチラシを配るお手伝いもできました。その時の子どもたちの表情は、少し照れたような、でもとても満たされている喜びに溢れたものでした。他者と共に生きていくことの喜びをこれからも、子どもたちが感じていくことができますようにと心から祈ります。



関東学院六浦こども園 副園長 鈴木直江

## のびのびのば園からの報告

### 「地域と共に育つこども園」

現在ののびのびのば園では地域のボランティアの方々が活躍しています。用務員として勤務されている方は地域の小学校の登下校の見守り等を行いながら、のびのびのば園の用務のお仕事をして下さっています。子ども達は用務員さんが大好きです。園のお掃除をしていると、「おじさん、何してるの?」と興味津々で周りに集まって声を掛けています。

1、2歳の子どもの外に出る時には靴を履くお手伝いをしてもらったり、年少、年中、年長の子どもの達はほうきを持って園庭掃除のお手伝いをしたりと、お仕事の傍ら、楽しいふれあいの時間を持つことができています。



又週に1、2回地域のおじいちゃんやタ方ボランティアに来て園児と遊びの交流をしています。おやつ後のひと時、室内でカードゲームを楽しんだり、園庭で一緒に遊んだり笑顔の交流の時間となっています。幼い子ども達にとっても、地域の方々にとってものびのびのば園に来て交流をもつ事は互いに刺激となっています。今後も地域ボランティアの方々との輪を広げていきたいと考えています。

また、のびのびのば園では3年前から地域連携担当職員をおいて、地域との繋がりを深める事に力を入れています。



昨年度から、野庭地域のふれあい祭りへの参加、港南区のゆめワールドへの参加、今年度は野庭地域全体での絵画と写真のコンクールに協賛する取り組みを行ってきました。港南区のふれあい公園で行われる港南ゆめワールドは毎年11月に行われ、2万人の方が訪れます。園の特色の一つである、「食育」活動への取り組みを地域の方に紹介しながらピーマンの試食会を行いました。又のびのびのば園オリジナルのもぐらたたきも出店して、大勢の地域の方に喜んで頂く事ができました。



のびのびのば園のあゆみは地域の方に見守られて歩んでいる事に感謝しながら、今後も地域との連携を密にしながら地域と共に育つこども園でありたいと願っています。

関東学院のびのびのば園 副園長 平 幸子



## 六浦小学校からの報告

## ことばがつうじなくてもなかよくなれる



2019年8月13日(火)～19日(月)六浦小学校の第18回タイ訪問団は、今年もタイ・カレン族の村で交流を行った。今年の参加は5家族、4教員。大石明德さんと4年生の大石雫さん、高木和也さんと4年生の高木梨沙さん、武田敏宏さんと2年生の武田周さん、佐藤麻代さんと5年生の佐藤愛基士君、武内清隆さんと3年生の武内琉泉さん。教員は島田正敏、石塚武志、石川雄治、高橋菜奈。9月の全校朝会で子どもたちがタイ訪問団の報告をした。

関東学院六浦小学校 教頭 石塚武志

ティワタむらで、女の子たちが「こっちへおいで」というかんじで、手まねきしていました。それで、わたしは女の子のほうへいったら、やさしくあそんでくれました。わたしは、その女の子たちと、おともだちになれた気がしました。そして、ことばがつうじないのに友だちになれたことがいちばんうれしかったです。こん回で2年目です。1回目いったときにであえたおねえさんたちはこん回あえませんでした。わたしはさびしかったです。でも、たとえこん回お友だちになった女の子たちとあえなかったとしても、わたしはあたらしいお友だちをふやすために、また、タイへいきたいです。

2年ヨナタン組 たけだあまね

わたしは、はじめてタイほうもん団にさんかしました。ティワタ村とよく話をきいていたので、ひこうきにのればすぐにつくのかと思いました。チェンマイからティワタ村まで時間がかかったのでびっくりしました。ティワタ村では、りょうの子たちとことばがつうじないけれどひょうじょうでコミュニケーションがとれて、仲良くなってうれしかったです。ことばがわからなくても、人と仲良くなれるんだなと思いました。とくに歌やダンスやサッカーは、ことばがわからなくても、みんなと仲良く楽しめるものだと分かりました。とくに6年生のニヴェという女の子と一ばん仲良くなりました。また、タイほうもん団に行きたいです。

3年ヨブ組 武内るい

私は、今年4年目のタイ訪問団でした。うれしかったことは、前の年よりも友達があえたことです。毎年友達に会うのが楽しみです。ティワタ村では友達といす取りゲームやビーチボールをふくらませてバレーボールをやりました。いす取りゲームのルールを教えるのがむずかしかったです。どうしてかという、言葉がつうじなかったからです。でも遊んでみるとルールが伝わりました。またタイに行きたいです。

4年ホセア組 大石雫

私は今回で2回目のタイ訪問団に参加しました。今年もとても楽しかったです。タイの子もたちのりょうの場所はティワタ村という山おくにあります。ホテルからりょうに行くまで6時間。遠いと感じるかも知れませんが、おかしを食べたり、おもしろいお話をしたり、ねむったりしながら、ティワタ村の子もたちに会えるのを楽しみにしていたので、あつという間でした。子どもたちとは、言葉は通じなかったけど、手や体を使ってジェスチャーでつたえたりして、いっしょに楽しく遊べたので、うれしかったです。ティワタ村のりょうでは、いろいろなし類のりょうりを出してくれてとてもおいしかったです。私たちが来たことをかんげいしてくれているのを感じました。来年はオリンピックの年ですが、私の5年生の夏休みは一生に一度なので、来年も大好きなタイに行きたいです。最後に年上のベガーさんからいただいた手紙を紹介します。「はじめに、こんにちば。リサ。リサの家族が幸せで健こうでありますように。お姉さんはリサとすごせてとても楽しかったよ。来年も来てくれる？ お勉強をがんばってね。いつも愛していて、会いたいと思っています。神様の恵みがありますように。リサ、愛しているよ。皆さまに神様の恵みがありますように。」

4年アモス組 高木梨沙

ぼくは、タイに行く前、友達ができるか心配でした。また、食べ物食べられるか心配でした。村に着いた時は、りょうの子もぼくもおたがいの様子を見ることしかできませんでした。でも勇気を出してダンスやジェスチャーでコミュニケーションをとっているうちにたくさんりょうの子と友達になりました。りょうの食事は、とてもおいしかったです。なんとカエルのすがたあげも食べました。村のみんなは小学生から高校生まで一つの家族のように仲良く生活していました。みんな笑顔がすてきでした。ぼくがタイ訪問団に行って感じたことは、家から学校に行けてること、家族といっしょに毎日すごせることはあたり前のことではないということが分かりました。これからは、恵まれた環境に感謝して、一日一日を大切に生きていこうと思いました。

5年エリヤ組 佐藤愛基士





## 小学校からの報告

# 友を知ることから始まるもの

小学校では毎年3学期に「友を知る礼拝」をまもります。この礼拝はクリスマス献金をお送りしている学校や施設、団体の先生をお招きして児童と保護者がともにおはなしをうかがい、理解と交わりを深める礼拝です。2019年2月には横浜訓盲学院から教頭の古田伸哉先生が来てくださいました。

礼拝の準備は2学期の終わりごろから始まります。まずはキリスト教委員の児童が横浜訓盲学院について調べます。子どもたちが知りたいこと、たとえば「どこにあるのか」「学院の歴史」「建学の精神」「教育の特色」などを直接横浜訓盲学院に手紙を送って教えていただいたり、インターネットで調べたりもしました。礼拝前日の朝には全校児童が礼拝堂に集まり、キリスト教委員が調べたことの発表を聴きました。キリスト教委員は発表の内容をまとめて新聞3枚を発行し、家庭へも発信しました。

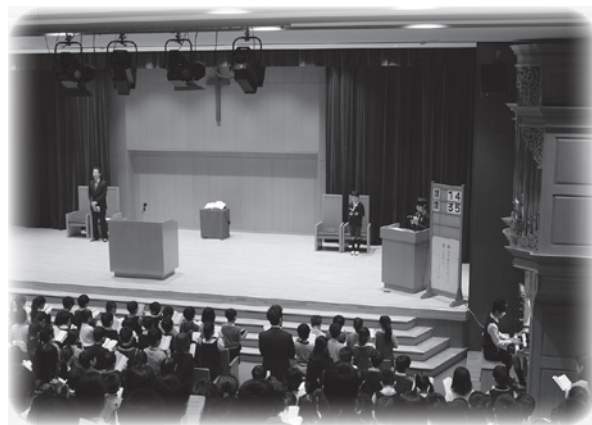
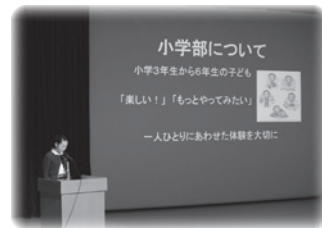


「友を知る礼拝」当日。古田先生はまず子どもたちに30秒間目を閉じるよう伝え、子どもたちにいろいろな

音を聞かせてくださいました。子どもたちは、目の見えない人の音の世界を実際に感じることができました。また先生から、学院にはどんな子どもが通っているのか、どのような教育をおこなっているのかなどをうかがい、子どもたちは横浜訓盲学院を身近に感じることができました。「友を知る礼拝」を通して横浜訓盲学院は「どこかにある普通の学校とはちょっとちがった学校」ではなく、「関東学院小学校のすぐ近くの中区にあって、自分たちと同じ小学生も通っている学校」、と知りました。礼拝のあと数日たって「正門横の通りを横浜訓盲学院の送迎バスが通っているのを見ました!」という子どもたちからの報告もありました。

知ることで見えてくる、知ること理解できる、知ること祈ることができる、そう感じます。「友を知る礼拝」を通して祈りの輪を広げていきます。

関東学院小学校 教頭 辻 望



## 六浦中学校・高等学校からの報告

ちいさなあいのわざ、世界へ届け  
～六浦中高オリジナル授業「地球市民講座」の一場面より～

「いま世界では、8億2,100万人の人々が飢餓に苦しんでいます!」と訴えかけるのは木村慎さん(早稲田大4年)。続けて「約30円の寄付でも1人の子どもの栄養



YVC代表の岩澤さん(64期生)

たっぷりの給食を1日分、届けることができます。」という国連WFPの学校給食キャンペーンをPRするのは伊藤清音さん(日本大2年)。本校オリジナル授業「地球市民講座」中学2年次後半の恒例プログラムの一場面です。

生徒が「子どもでも社会は変えられる。社会貢献活動は特別なことではない。」ことを実感することを目標としたこの単元は、毎年、認定NPO



地球市民講座での講演会のようす

法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン(FTCJ)代表理事の中島早苗さんと、ユースボランティアセンタージャパン(YVC)のみなさんの講演を通して学習しています。冒頭の2人はYVCのメンバーですが、この2人の話しを聞く生徒たち、他の講演の時と比べると、ややリラックスしているように見えます。それもそのはず、この2人は本校の卒業生です。

## &lt;高校生が起ち上げたNGO&gt;

「アフリカで飢餓に苦しむ子どもたちに、いまの私たちができることはないか。」YVCはそんな思いからはじまりました。発起人は当時、本校の高校2年生だった岩澤歩加さん(現、法政大4年)、山田祐香里さん(現、日本大4年)たち3名。自分たちで勉強会をすすめ、講演会・シンポジウム参加や国連WFPのワークショップ参加等を経て、



国連WFP広報活動の支援のようす

2015年2月、「飢餓撲滅をめざし、ユースの主体的行動によって国連WFPの活動を支援する」任意団体をスタートさせました。

その後、飢餓やWFPの活動を紹介する講演会やワーク

ショップの開催、出張講演、国連WFPのイベント支援等の活動をしています。大学生から中学生の会員がボランティアスタッフとして所属しており、2019年秋には、国連WFPのチャリティーグッズ(絵入りボールペン)の開発にも協力しています。

中高生対象のワークショップのようす  
(於 関内メディアセンター)

## &lt;ちいさなあいのわざ、世界へ届け&gt;

YVC創設の時、メンバーは受験生でした。受験を終えてから行動する選択肢もあったと思いますが、飢餓状態の人々へ食糧を届けることに「猶予」はありません。受験勉強と並行してでも、前述のような準備を進めていた原動力は一人ひとりの中に芽生えていた「ちいさな奉仕のこころ」であり、そこから生まれた「ちいさなあいのわざ」であったように思います。校訓に根付いた行動が、この地球市民講座を通して後輩に受け継がれ、またあらたな行動が生まれていく。そして、あいのわざは小さくても、神の御手がはたらいて世界へ届いてくれることを信じたいと思います。



在校生のYVCメンバーによる文化祭でのSDG2「飢餓」のアピールブース

そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』  
(マタイによる福音書 25章 40節)

関東学院六浦中学校・高等学校 教諭 手塚裕貴

## 中学校高等学校からの報告

### 関東学院と沖縄をつなぐ縁に感謝

2018年関東学院大学法学部長の村上裕先生と交換した名刺には見慣れた書体で「人になれ 奉仕せよ」とありました。

思わず♪Be a man and serve the world…と心の中で歌う私。なつかしい講堂の風景が思い出されます。

学校のことはすっかり忘れて沖縄本島に暮らしていた私は、この日を境に関東学院とのつながりがどんどん広がっていきました。

そして今年、2019年9月2日から関東学院大学法学部の学生が、私が関わる短期プログラムにやってきたのです。

#### <沖縄創生まじゅんプロジェクト>

これは大学の地方創生支援事業で地方と東京圏の大学生対流促進事業です。関東学院大学では、沖縄大学と事業を行い、国内留学と称して長期、短期で学生の対流が行われています。



その中で私がコーディネーターとして担当したのは二科目。「泡盛」という沖縄のお酒の地場産業に焦点を当て、歴史、製造方法、

商品開発、営業に至るまでのほぼ全てを体験し、今後の泡盛市場について提言するというプログラムでした。

次に、沖縄式円卓会議。これは、いままでとは一味違う会議の手法を学ぶ講義で、地域の困り事を課題として見つけ出し、共有、共感する場となっています。今回のテーマは「大学生の貧困を考える地域円卓会議」で学生にとって身近で考えさせられる内容でした。



いずれのプログラムも前向きな学生達と実りある時間が過ごせました。

#### <高校とのつながり>

実は今回の円卓会議には中学校高校の社会科の新堀雄介先生と理科の川島洋一先生が見学にいらしていました。

私が卒業生であることは、富山隆校長先生には伝わっていましたが、遡る半年程前に修学旅行のプログラムの見直しを考えているので相談できないかという連絡がありました。こうして今度は中学校高等学校とのやりとりが始まりました。

見学後、今回大学で開催された円卓会議は高校生にも十分展開できるのでは?という手応えを感じ、新堀雄介先生をはじめとした先生方と、学びの場、話し合いの場とした沖縄でのアクティブラーニングを企画しています。これは2023年度から総合探求として沖縄に訪れるための準備の最初の一歩です。これからは、受け身ではない旅行体験をしてもらいたい。そして訪れる生徒らが沖縄を好きになって帰ってもらえるように。微力ながら協力できたら良いと考えています。

今回短期プログラムで訪れた学生を目の前にして感じたのは、国内留学という名の通り、ホストファミリーのような気持ちで迎え入れることこそが、私の担う役目なのかなという気持ちです。

学生時代、身近にあった「人になれ 奉仕せよ」という言葉は、今となっては相手を思い、奉仕することが自分の喜びになるということを実感しています。

平良 恵津子(旧姓 矢崎)  
高等学校38回卒  
女子短期大学英文科37回卒



平良氏は沖縄県在住で病児を応援する病院ラジオ「キラキラぶればランド」放送を担当されています  
<https://ameblo.jp/radiokirakira/>



## 大学からの報告

2019 年度東北ワークキャンプ  
～震災ボランティア～

2011年3月11日の東日本大震災発生後、多くの大学がボランティア学生を組織し現地での活動を行ってきました。関東学院大学も2011年8月初めから夏冬延べ19回、ボランティア活動や研修活動を行っています。縁あってそのすべての活動の事前調査・企画・立案そして現地での活動に参加させていただきましましたので、個人的なものまで含めると、この8年間で40回以上南三陸を訪問しています。今では、自分の住んでいる地域よりも、確実に顔なじみの方が多くなっています。

今年度も2019年8月30日から9月1日にかけて、学生10名、職員5名のチームで訪問させていただきました。現地でのボランティア活動が組まれている時期は、五泊六日や四泊五日でしたが、研修が中心になってくると徐々に日数が短縮され、現在では二泊三日というプログラムで開催されています。実施期間が短くなった分、中身を濃いものにしようと心がけて企画させていただきました。

今回の初日は気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館でした。ここは気仙沼市南部の海岸に近い場所にあった気仙沼向洋高校の遺構です。現在、同校は内陸に再建されています。震災発生直後、教職員に引率され校内にいた百数十名の生徒は内陸の高台へ避難し、津波襲来時は教職員と校舎改修工事の作業員約40名が残っていたそうです。校舎は四階建てですが、津波は四階床上まで押し寄せ、校舎内にいたみなさんは屋上に避難し一命を取り留めたとのこと。雪の降る寒い中、浸水を免れ教室のカーテンを身体に巻きつけ急場をしのいだそうです。

今回、語り部の方に案内をお願いしました。特に印象深かったのはすっかり消えてしまった周辺の町並みの話です。一キロほど彼方の携帯中継局のアンテナが立っている小高い場所が地域の避難場所だったそうです。避難訓練どおりにそこに集合した住民は津波に流され93名が犠牲になったとか。避難訓練は大事だが、その場の状況に応じて対応しないと大変なことになるという事例でした。逆に、臨機応変に次々と場所を変え避難した教職員・生徒たちには一人の犠牲者も出ませんでした。現地に行き、様々なお話を聞いていると、特に「マニュアルどおりではだめ」「臨機応変に行動しないとだめ」ということばかりが強調されます。

ちなみに、この語り部の方はご両親と奥様を津波で亡くされているとのこと。震災後はしばらく当時のことを思い出したく

なかったとのことでしたが、伝承館が造られ語り部を募集しているという話に自分が伝えていかないといけないという思いがふつふつとわき、今年3月の伝承館開館とともに活動を始めたとのことでした。同行した学生たちは一言も発することでもできず耳を傾けていました。

二日目は2011年8月以来継続して交流させてもらっている南三陸町志津川の皆さんとの懇親会です。震災前、JR気仙沼線志津川駅西側には中瀬町行政区という約200世帯の町内会がありました。震災後、行政区としてできるだけまとまって避難することを心がけ、2011年4月から7月まで隣の登米市の山間にある廃校になった小学校校舎に集団避難。関東学院とのお付き合いはこの避難所から始まっています。その後、8月から元の中瀬町行政区の浸水を免れた場所に仮設住宅団地を造成し、そこにも集団移転。その後、志津川西復興住宅と呼ばれる高台造成地に仮設住宅団地から多くの方が移転されました。私たちは、高台移転後もそのご縁を切らさないようにしてきました。それは、実際に現地での皆さんとの交流を通じ、実に多くの学びや気づきの機会があるからです。震災当日の話、避難所での話し、復興過程での裏話。会場としてお借りした集会所で、いくつもの小さなグループになり学生たちに一生懸命語りかけていただきました。学生たちも必死に理解しようとして真剣に話を聞いていました。

最終日は、石巻市立大川小学校へ。大川小学校では、児童74名、教職員10名が犠牲になりました。大川小学校は、北上川の河口から四キロもあり津波襲来は想定されていない地域でした。現に、この大川小学校の校庭が一次避難場所になっていて付近の住民も小学校の校庭に避難しており、住民の犠牲も多かった場所です。ここもやはり決められた手順に従った結果、最悪の事態を招いた例として十分検証し後世に伝えていかなければならない場所です。

日々の生活の中で、大災害はいつ私たちに襲い掛かるかわかりません。そのときいかにして他人任せにせずマニュアルのみに頼らず、状況を的確に判断し、臨機応変の対応ができるか。その答えは、今すぐに必要かもしれません。それが、理不尽にも突然命を奪われた多くの皆さんの思いに答えることになるのではないかと、あらためて肝に銘じた三日間でした。

関東学院大学 学生支援室 鈴木康夫



# 日米関係史のなかの「中学関東学院」—関東大震災後の一側面—

関東学院 学院長付（学院史資料担当） 渡邊 茂

「中学関東学院設立100年」(2019年1月)  
と「坂田祐没後50年」(2019年12月)

2019年には元号が「平成」から「令和」へと代わり、2011（平成23）年3月11日「東日本大震災」のことが「平成の大災害」として振り返られていました。

本稿では、1923（大正12）年9月1日「関東大震災」以後の歴史を振り返りつつ、第一次世界大戦後の大正期日本における関東大震災後の「中学関東学院」について再確認する機会を得られればと考えています。

かつて拙稿「第一次世界大戦後（第二次世界大戦前）の『1919年』—小川圭治学院長から触発されて想うこと—」（『学院史資料室ニュース・レター』第21号、2018年3月）では、「2019年」を迎えるにあたり、坂田祐学院長が志向されたことについて振り返りました。

『学院史資料室ニュース・レター』第21号の発行人は小河陽学院長でした。前学院長である小河陽学院長のもと、坂田祐学院長の唯一の著書（回想録）である（『恩寵の生涯』及び『新編 恩寵の生涯』の内の）『新編 恩寵の生涯』復刻版（学校法人関東学院、2018年12月）が「新装刊行」された意義については、同書に小河陽学院長ご自身が記された「新装刊行に寄せて」をご参照いただくようにと、松田和憲 現学院長も述べられています（2019年1月）。

「人は時代といかに向き合うか」

坂田祐と同じく内村鑑三の直弟子で、第二次世界大戦後初代の東大総長（敗戦後に東京帝国大学は東京大学と改称）を務めた政治学者 南原繁が『恩寵の生涯』に寄せた「序文」（1966年1月12日付）について、前掲拙稿にて再確認した際、東京大学法学部での南原繁の学問的遺産を継承する一人として、日本政治外交史研究の碩学である三谷太一郎氏の著書『人は時代といかに向き合うか』（東京大学出版会、2014年）における「あとがき」にも触れました。その三谷太一郎氏による論考「二つの戦後—パクス・アメリカナと日本の『デモクラシー』—」（初出は『中央公論』1985年4月号）においては、次のように述べられています。

「体制としての「大正デモクラシー」の成立が形成期のパクス・アメリカナへの日本の適応であったということは、ちょ

うど明治国家の出現がパクス・ブリタニカへの日本の適応であったということと同じ意味をもっていた。明治国家の外交が日英同盟に帰着したように、「大正デモクラシー」の外交はワシントン体制に帰着したのである。》（前掲『人は時代といかに向き合うか』、51頁）と。

第一次世界大戦後にアメリカ合衆国が「パクス・アメリカナ」を形成していく時代、アメリカ・バプテスト教会の宣教師 C・B・テンネーによって設立された「中学関東学院」という名の「旧制中学校」形成期を振り返ることは、「学院史」のみならず「日米関係史」の一側面を照射する契機にもなるものと存じます。

因みに坂田祐は、そのテンネーによって招聘された「院長」（校長）ではあっても、「設立者」ではなく、慶応義塾の福沢諭吉や、同志社の新島襄 等とは、立場が根本的に異なることも再確認しておきたいと存じます。

関東大震災後の「排日移民法」（1924年）

1919年1月に設立され、同年4月の第一回入学式を経て、前途多難の中にも新しく出発した中学関東学院が、関東大震災（1923年9月）に遭遇し、校舎の崩壊等物心両面での痛手を受けたのは悲劇的なことでした。

1924年3月には（同じくバプテストの伝統に立つ）捜真女学校講堂をお借りしての第一回卒業式を無事に終了したものの、震災後の復興（復興資金の調達）は、関東学院における最優先の課題となっていました。

（『関東学院百年史』、337–343頁参照。）

1924年5月、米国連邦議会での排日移民法成立は、第一次世界大戦後のアジア・太平洋地域における国際協調体制「ワシントン体制」確立直後の「不幸な事件」（五百旗頭真 編『日米関係史』有斐閣ブックス、2008年、98頁）とも位置付けられています。

坂田祐は、《わたしの生涯に於て、わたしにとって最も重大なことは、わたしが一高在学中に、内村鑑三先生の弟子となったことである》（前掲『新編 恩寵の生涯』復刻版、74頁）と確言します。その内村鑑三は、この人種差別的な排日移民法成立後の日本において、対米強硬論、反米世論の代表的論客の一人となります。

内村鑑三研究の碩学である鈴木範久氏も「この排日法案に対して内村の行なった反対活動は、やや感情的なものともされ、…このことは、内村の世界主義において、表面には現れず沈殿していたナショナリズムが浮上したものとみられなくもない。」(鈴木範久著『内村鑑三の人と思想』岩波書店、2012年、216-217頁)と指摘しています。(なお鈴木範久氏は、かつて、三春台にある「坂田記念館」へも来訪されています。)

もっとも、欧米先進国が「キリスト教文明」の美名のもとアジア・アフリカ諸国を「植民地支配」していた時代に、内村鑑三や植村正久のような優れた知識人である日本人キリスト者たちが、激しく「対米批判」を展開したことには(「対米従属」へのプロテストとしても)「一理」はあると考えます。(植村正久については今日なお、京極純一氏の古典的論文「日本プロテスタンティズムにおける政治思想―植村正久の場合」〔丸山真男・福田歓一 編『南原繁先生古稀記念論文集・政治思想における西欧と日本』下巻、東京大学出版会、1961年〕も参照されるべきと存じます。)

## 「学院史」との関わり

後の「日米開戦」(1941年12月)の遠因の一つともいわれ得る「排日移民法」(筒井清忠著『満州事変はなぜ起きたのか』中公選書、2015年、80頁)については、当時の日本におけるバプテスト教会の(週刊の)機関紙『基督教報』にも報告されています。例えば、震災からの復興費募集のため、テンネー、坂田祐と共に渡米するバプテスト宣教師アキスリングは、次のように述べています。

「不肖乍ら、日米親善の爲に盡したる小生は、此の度、米國の議會及上院を通過せし移民法案の故に熱き涙を流さざるを得ない。」(「我がゲツセマネ」、『基督教報』第743号、1924年5月2日、1頁)と。

そして、このときの渡米が「復興費募集」のためだけでなく、以下のように強調されています。

「アキスリング氏夫妻、テンネー氏夫妻、坂田祐氏の諸氏近日渡米せらるゝに付き其送別會が四月二十七日午後二時三崎會館に於て開かれた。…テンネー、アキスリング兩氏今回突發したる排日問題の爲め出来る限り盡力し同時に復興費募集に就ても全力を盡す覺悟なることを述べられた。最後に坂田氏は自己の信仰の上に立つて米國の諸兄弟姉に訴ふる趣を語られた。」(「教況」欄、同上、7頁)と。

その当時、三崎會館で働いていたバプテスト宣教師ダグラス・ハリングは、次のように述べています。

「米國基督教會は日本の立場に對して十分の同情を持つ

て居る事を知つて戴きたい。米國基督教會聯盟は、今次、排日法案通過の阻止、及び大統領の否認權行使のために多大の盡力をした。今日では既に排日法案が法律となつたのであるが、米國基督教徒は決して此の問題の争點を忘れるはしない。」(「一宣教師の告白」、『基督教報』第748号、1924年6月13日、5頁)と。

日本人の立場からも、例えば友井楨は、次のように(内村鑑三等とは異なる)慎重な姿勢を示しています。

「今日の新聞は、煽動的に傾きつゝあつて、米國人が排日法案通過以來一層日本人に對して同情を表する様になつたなどと言ふ事を悦ばないが、矢張り、それは事實である。日本の基督者は、今日の新聞の論調に惑はされて、吾等の友を敵とするやうな愚に陥りたくないものである。」(「移民法案と米國基督教會」、『基督教報』第750号、1924年6月27日、2頁)と。

そして、米国滞在中の坂田祐学院長等については、次のようにも報告されています。「去五月…廿八日(水曜)は終日日本に就て費し、午前はアキスリング博士、午後はテンネー博士及び坂田關東學院長交々起つて、熱辨を振はれ、大いに日米親善を力説せられた。」(渡部一高「北部バプテスト大會」、『基督教報』第751号、1924年7月4日、7頁)と。

## 「パクス・アメリカナ」を超えるもの

20世紀における二度にわたる「世界大戦」の結果として形成された「パクス・アメリカナ」は、21世紀の今日、文字通りの意味でのグローバル(グローカル)な観点から歴史的に見直される必要があると存じます。

古代地中海世界における「パクス・ローマナ」を根源的に超えるところで成立した本来のキリスト教を「建学の精神」とする関東学院では、そのことを「学院史」との関連においても再確認すべきと存じます。

本稿欄筆にあたり、前掲『関東学院百年史』(学校法人関東学院、1984年10月6日発行)の刊行時における学院長であった柳生直行訳による『新約聖書』の証言を、前掲拙稿においてと同様、ここに引用します。

「今われわれが受けている、この世かぎりの軽い患難は、やがて、永遠の圧倒的な栄光に取って代られるのである。われわれは見えるものではなく、見えないものに目を向けている。見えるものは過ぎ去ってしまうが、見えないものは永遠に存続するからである。」

(「第二コリント書」第4章17-18節、『新約聖書』柳生直行訳、新教出版社、1985年、378-379頁。)



## ◆寄贈資料の紹介◆



— 佐々木敏郎先生  
(元大学教授 元学院宗教主任)  
寄贈スライドの中から —



アキシリング夫妻送別会 昭和29年12月12日三崎会館にて



50年にわたる日本の宣教活動に別れを告げる日 昭和30年1月

アキシリング William Axling (1873-1963) —戦前と戦後の関東学院理事・理事長—

アキシリング博士は関東学院だけでなく日本とその教会、学校、社会事業の復興のために、力の限りを尽くして活動された。その貢献に対して1954年に日本政府は勲二等瑞宝章を授与、東京都は外国人として第一号の名誉都民の称号を贈った。寄贈されたスライドは日本を去る最後の日のものである。

「昭和30年1月18日、正午、夫人とともに、横浜の私の宅に来られ、午餐のすき焼をともにされ、その日の夕方クリーブランド号で帰米された。在日50年、満80歳であった。(中略)博士は宣教師としての働きのほか、日米親善のためにも大いに尽くされた。」『恩寵の生涯』 坂田祐著より

### ◆ニュース・レター No.21 収録記事に関する修正

P.20 右上写真 1892 (明治 25) 年 14 歳 毛馬内高等小学校二年終了 (誤) → 毛馬内高等小学校二年修了 (正)

### ◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さまに学院に係る資料・情報の寄贈をお願いしております。

近年はデジタルアーカイブ構築のため、データを収集する目的で皆さまより資料をお借りして電子データを作成し、データ登録する業務も行っております。お借りした資料は処理が終わりましたら返却させていただきます。

お手元にあります学生時代のお写真や学院のパンフレット、式典、学祭の配布物など、大切な記録かと思いますが、学院史資料の収集にご協力いただけますよう、お願いいたします。資料のご提供については以下にご連絡ください。

Tel:045-786-7066, E-mail:archives@kanto-gakuin.ac.jp 学院史資料室事務室

### 編集後記

2019年10月12日は、大型の台風19号の影響により本学院の位置する神奈川県においても記録的な大雨となり、各校地で倒木や門扉破損、倉庫転倒等の被害があった。10月に大型の台風がそれも関東地方を直撃するという昨今の異常気象を目の当たりにした日でもあった。当日は、学院創立135周年記念式の日であり、当然のことながら中止となったのだが、ふと気になり学院の長い歴史の中で式典が自然の影響により中止や延期となった日があったか調べてみたがそのような記録を見つけることはできなかった。今回のことも長い歴史の1ページであったのだと感じた瞬間であった。

今後もこの『ニュース・レター』を通して、学院の歴史資料にその当時に実際に立ち会ったような、歴史を感じることでできる紙面を目指してまいりたいと思います。関係各位の一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

学院史資料室事務室長 山田昭夫

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第23号

発行日 2020(令和2)年3月1日

発行人 関東学院 学院長 松田 和憲

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL.045-786-7066 FAX.045-786-2932